

## 〈研究ノート〉

# 「李ライン」により拿捕、抑留されたA氏に聞く

鈴木久美（大阪経済法科大学  
アジア太平洋研究センター）

## はじめに

「李ライン」とは、1951年1月、韓国の李承晩政権が「海洋主権宣言」により、隣接海域に設定した境界線のことである。韓国側はこれを「平和線」と呼称したが、日本側は「李ライン」（以下、括弧を外す）と呼んだ。李ラインは、国防目的で設置されたというより、竹島の領有権を主張することと、マッカーサー・ラインが撤廃されると、日本漁船が大挙して韓国近海に出漁し、零細な韓国漁業が壊滅的打撃を受けるのを未然に防ぐことを目的としていた。その結果、韓国による日本漁船の拿捕は、1965年の日韓基本条約・漁業協定締結まで、累計325隻に及び、抑留者も3,909人に及んだ（片岡千賀之『長崎県漁業の近現代史』2011年）。

現在、拿捕、抑留の経験者で生存されている方はきわめて少なくなっている。筆者は2007年3月と9月に、宮本正明氏と内藤寿子氏の3人で拿捕、抑留の経験者A氏にインタビューを行い、内容をまとめた小冊子を発行したが、限られた関係者にしか送付されていない。

そこで、筆者は2014年の7月と9月、あらためてA氏にインタビューし、証言を得ることができた。本稿はその際のA氏の証言をまとめたものである。

## 1. A氏の略歴

1928年（昭和3年）11月23日徳島県で生まれる。旧制中学3年終了後、予科練を志願し松山海軍航空隊に入隊する。特攻訓練中に終戦を迎え、1946年（昭和21年）3月、復員後に復学した中

学を卒業し、長崎にわたり叔父のS氏のもとで遠洋漁業に従事する。

1948年（昭和23年）には船長の資格を取得し、底曳網漁業やサバの跳ね釣り漁を行う。

1955年（昭和30年）8月8日、A氏が乗っていたS丸（S氏保有）は、サバの跳ね釣り漁中に「李ライン違反」で拿捕される。韓国における裁判の結果、「漁業資源保護法違反」で、船長であったA氏には懲役1年の判決が下される。

1956年（昭和31年）8月26日に刑期を終え刑務所を出所したが、日韓に国交がなかったため、そのまま釜山外国人収容所に留め置かれることとなる。

1958年（昭和33年）2月28日に抑留漁船員帰還第2陣（200人）の一人として帰還する。帰還先の港は山口県下関である。A氏の船員手帳の記載によれば、抑留期間は昭和30年8月8日～33年2月28日と記されている。日本へ帰国後もA氏は、1989年（平成元年）に定年退職するまで漁業にたずさわり続けた。

以下はA氏の証言である。

## 2. 拿捕された経緯

### (1) 拿捕

昭和26年（1951年）頃から、済州島沖でサバのはね釣り船が増えました。私の会社も夏はサバの跳ね釣りをし、冬は底曳きをしていました。サバの跳ね釣りは40人くらいでやっていました。私の乗っている船は54トンの船です。サバは本当によく獲れました。拿捕された時は、サバ漁の時で、みな夢中に獲っていて、李ラインなんか全然頭になかったです。でも、李ラインを超えていることはわかっていました。日本

は承認していませんでしたから、日本の監視船は行け行けと言っていましたね。韓国の警備艇は、日本の海上保安庁も持っていなかった、日本の無線の回路を持っていたんです。それで、保安庁の船かなと思ったら違うんです。向うは無灯で来ましたから、全然わからなかったです。日本の保安官かと思って、ひょっと見たら、何か銃を持っています。そばに来て、いきなり銃ですから。あらっと、いやー、その時はもうやられたって感じです。他の若い船員はボサ一となりました。ただ、船の反対側で漁をしていた者たちは、すぐに気が付かなくて、その時も夢中で漁をしてましたね。その時には、4隻一緒に捕まりました。ある船は、船長が（旧日本）海軍の将校だったと思います。（韓国の警備艇から銃を向けられた時に）その人は「全員伏せ！」と言って、自分はブリッジで布団をかぶって逃げたんですよ。私たちは、その時は捕まったために船倉内にいたんです。そうしたら、パン・パン・パン・パン、音がして、撃たれたかなと思ったら、ドスン・ドスンという音がして、とうとう捕まりましたね。空砲か何か、弾を込めて撃ったんですよ。威嚇射撃か何か聞こえました。

拿捕されたのはこれが初めてですが、拿捕される覚悟で漁に行っていました。拿捕保険に入っていましたからね。ただ、漁に出る時には、現金を持って行けと。「拿捕されたら、これをやれ」とね、そんなことを言う役人もいましたからね。私、この捕まる前に一度、向うから何か監視船が来たということで、皆で一緒に逃げたんですが、追っかけてきて捕まったんです。その時は始末書で済んだんです。だからまた今度も済州島まで引っ張られていかれたけど、始末書で済むのかなと思ったんです。始末書で済んだ時も、後で捕まった時も、だいたい操業していたのは同じぐらいの場所でした。済州島の近くですかね。最初は向うも（韓国）捕まえる気がなかったんでしょうね。日本の現金を、いくらか、10万円くらい渡せば見逃してくれるとか、そんな話も聞いたことがありました。

## (2) 拿捕後

捕まった時には、船長と船員全員が、その監視船（韓国）にさせられ、船には操縦のために2

～3人だけが残されました。船長がいないので代わりの人が舵を持って、そのあくる日に済州島に入りました。済州島に着くと、船長・機関長は陸にあがり、船員は逃げられないように、エンジンの油入れを外され、逃げられないようにされました。船長を人質にとって、釜山に行くまで3日ほどかかりましたね。途中で島に着けました。たぶん巨文島だったと思いますが、港に着くと、島の有志みたいな者呼んで酒盛りをするんですよ。それで、船長だった私だけがそこに呼ばれました。そしたら、魚を沢山持っていたら罪が重くなるから「魚売りなさい」って言われたんです。「あんたたちは煙草銭がいるだろうから、売りなさい」って。それで、「そうかなあ」と思ってね。でも、魚が多いも少ないも罪は一緒でしたよ。うまいこと言って、魚を売らして、油なんかも売ったのでしょうね。それらを売ったのは、もちろん彼らで、それで私には煙草銭と言って、煙草1箱くれたのかな。狡かったですよ。それと、ブリッジや魚群探知機の記録紙やなんかも、釜山の港に着いたら1本もありませんでした。全部取られましたね。あの頃は向うも（韓国）貧しかったですからね。

済州島に連れて行かれて、それから巨文島に、そして南海島だったかな、そこに行ってから釜山に行きました。二つの島では船長と機関長は陸にあがって、それで逃げられないように船員は船に残していましたね。会話は捕まった時から日本語で話をしていました。日本語には不自由しなかったですね。

釜山の港に入る時には、監視船が先に行って、その後からずらっと4隻の船が並んで、これが音楽をかけてね、ばんばん、ばんばん、日本海軍の軍艦マーチみたいなやつを。意気揚々と凱旋ですからね。港では魚市場に着いて、そこで一晩泊まって、あくる日に各警察署に連れて行かれました。捕まった人間が多いですから、各警察署の留置場に分散されました。昼に上陸してから留置場に行ったのは晩だったですかね。最初にここで、「君たち晩飯食べたか」と聞かれて、「いや、食べてません」と言ったら、「ここの飯は麦飯だから、いいですか」と言われてね。「いや、いいです」ということでね。麦飯と言えば、やっぱり半々か、そこらかなと思ったら、出てきたのは麦ばかりです。本当の麦

飯で、木の箱に入っているんです。臭いんですね。おかずは味噌で、隅っこにちょこっと味噌が乗っているんです。

### (3) 留置場での取り調べと裁判

最初は、警察の人はやっぱり態度が大きかったですね。最初に取り調べられた人は五島列島の人で、年寄りの方で、コック長をしていたんです。最初は自分たちの家族調べもあるんです。子どもは何人とか、妻の名前とかね。警察の人が五島列島の人に、「あんたの妻の名前は何かですか?」と言ったら、「エバタ・ツマ」と言っただけです。エバタは名字で、奥さんの名前がツマですよ。「だから、その君の妻の名前を聞いているんですよ」と。「エバタ・ツマです」と、五島の人は言って。警察の人は、「君はわからんやつだ」と言っていました。大笑いしました。

刑務所の未決に入って、そこから裁判、検事調べが2回くらいありましたかね。それから裁判があって、それでもう2回目には法廷で判決ですものね。弁護士がおりませんでしょう。一応国選弁護人がついてはいたけど、それで日本語で「この人たちは悪気があって来たんじゃないからね、魚を追っかけて知らず知らずに入ってきたんだから罪はない」とか、うまいこと言うんですね。うまいこと言うなと思いました。

判決は、船長が懲役1年で、機関長、局長、通信士は10カ月でした。それで船員が8カ月でしたね。未成年者が6カ月です。それで「控訴しますか?」と言われて、別にね、一応言うことは言うのですよ。裁判で判決が決まったら、頭全部丸坊主にして、警察から刑務所に入った時は、全部私物は納めて、真っ裸になって全部調べるんです。どこに傷があるか、アザがあるか、腕まで調べるんですよ。

未決の時でも裁判所に検事調べに行くでしょう。それもトラックですものね。数珠つなぎで、靴はあの朝鮮のゴム靴履いて、何もないトラックで行きました。釜山の街の中を、あーだのこーだのと言って、怒られて。数珠つなぎでしょう。一人転げたらみんな転げるんですものね。それで検事舎といっても、待つ間にちっちゃい部屋が横にあったんです。そこに二人あてぐらいの班があって。私は一度、韓国人と一緒にあって、その韓国人になんか差し入れがあっ

たんです。私に半分くれてね。ゆで卵だったかな、あげると言って半分くれました。何の罪状かわからなかったですけど優しい人がいました。

## 3. 刑務所での生活

### (1) 刑務所内の食事

刑務所に最初に入った時は晩でした。毛布と食器を二つくれたんです。その食器にご飯とおかずを入れてね。そしたら薄暗い所だから、なんかこう色の付いた豆飯かと思って見たら、大豆がほとんどですものね。それで丸麦と米が少し、これが刑務所の食事ですよ。刑務所の食事は仕事によって、1等食・2等食・3等食とありました。日本人は仕事もないし、差し入れもないから3等食ですよ。おかずは昆布の佃煮かと思ったら、ホンダワラと言って、海藻なんです。なんか塩漬けですよ。塩辛みたいな。最初はこんな飯、食えるかどうか、慣れないなと思いましたね。

刑務所の中では暇でした。それに時計がないから、窓から日が差すでしょう。影がここに来たら朝飯と、影を時計にしていました。日時計ですね。食事は大豆があるでしょう。これは、ある程度栄養があるから誰も病気をする人はいなかったですね。船に乗っていた時には、年寄りがたくさん薬を持っていて、胃が悪いとか言っていました。それが、全然、もう病気はなくなっちゃってね。そんな感じでした。だから人間は、暴飲暴食は一番いけないですね。決まった時間に規則正しく食べる、それが一番だと思いました。

食事は年に4回米の飯が出ました。正月と8月15日とクリスマスと、もう一つは何だったかな。その日は朝から刑務所で米の飯ですよ。それはうまかったですよ。大豆ばかり食べていたからね。おかずは少なく、味噌汁は汁だけですよ。具も何もなし。たまに大根の葉っ葉とかなんか、砂だらけの、あんなのがあったですね。正月には雑煮があったけど、うどん粉を棒にしたやつを、ちょんちょん切ったやつが餅の代わりに入っていました。それで、満期の日になったら、朝からもう「早く出て来い、早く出て来い」と言われてね。もう1日でも間違えて置いたら刑務所の所長の罪になりましたからね。当日

は、朝から「早く出て来い」って、飯もろくに食べさせてくれなかったですよ。ただ、食堂がありましたから、お金さえあれば臭い飯を食べなくてもいいんですよ。うどんが1杯100円、白飯も1杯100円でした。朝、注文にくるんです。「今日は誰かいますか」と。注文した時には食堂に行っておくんです。

## (2) 刑務所内の出来事その1

刑務所内では全部日本語でした。刑務所の看守でも日本の教育を受けていたんですよ。看守は私たちに、「今、あんたたちボサッとしてないで韓国語習ったら、いつか役に立つから習いなさい」って言っていました。今思えば習っておけばよかったかと、さんざん思いました。昭和33年まで2年何カ月か居たんですよ。朝の点呼の時、番号は韓国語で「ハナ、ツル、セー、・・・アホブ」の「アホブ」だけは、みんな大声で言うんです、日本語の「アホ」と同じでしょう。可笑しかった。あとは日本語で通じましたもんね。

私たちの部屋の壁に「恨みは深し李承晩」と彫ってありました。それが見つかって、「誰が彫ったのか」と言われてね。私たちの前に捕まっていた人が彫っていたんですね。そんな事もありました。李承晩はクリスチャンだったんですね。クリスマスの日には、刑務所に慰問が来るんです。晩には聖歌を歌ってくれましたが、「ええい、やかましい！」と言ったものの、看守がお菓子をみんなに一つずつくれた時は、「ほーこれは良かったね」と言って食べました。五島列島の玉之浦の人でクリスチャンの人がいました。その人だけが別に天主教房といって一部屋に住んでいたんです。一部屋、刑務所の中にあつたんですよ。それで日曜日になったら外に出て教会に、講堂に行ってお祈りしていました。クリスチャンは待遇がよかったですよ。

## (3) 刑務所内の出来事その2

### ①慰問品その1

日本から慰問品が届いて、家族の写真も送られてきました。しかし、子どもの写真なんかも全部没収ですよ。私たちが見たら、預かるのです。それで月に一回ぐらい「写真面会」というのがありました。講堂へ行って、自分の

家族の写真が配られるんです。それを見て、それからまた没収されて。刑務所の監房の中に持っていったら、ホームシックになるでしょう。脱走する恐れがあるから持たせないと言うんです。月に一回か、2カ月に一回くらいだったと思います。手紙は来たらその都度検閲でした。手紙の宛名に関してはやかましかったです。「大日本国」と書いたら駄目でした。「日本国長崎県、どこそこ」とかで、韓国の場合には「大韓民国」と書かなければいけなかったのです。「韓国釜山」では駄目でした。

衣類は全部私物です。支給されたものは、ただ青い囚人服と、あと冬は綿入れのチョッキが一枚、それだけです。その後、何カ月か経って日本から慰問品が来るようになりますね、その時には食料もくれるんです。缶詰とかいろいろ、お菓子なんかも一斗缶にいっぱい、一人に来るんです。その一斗缶を開けて中をカラにしたら、夜に看守がそっと、「その缶をくれ」と言うんですよ。一斗缶をあげると、看守は恥ずかしいから、私たちの見ている前ではその缶をボンボンと蹴ってね、見えなくなったらそれをずっと持って帰るんです。年寄りの看守がね、「恥ずかしい話だけど、うちの家の屋根が雨漏りする」と言うんですよ。「屋根が漏るから、その一斗缶を使って屋根を修繕するのください」と言うのです。その代わりに煙草をくれました。「人に見つかるから早く吸え」と言われてね。それであの頃は昭和30年で、朝鮮動乱が終わってすぐだったでしょう。だから釜山の街でも電車で窓ガラスがなかったんですよ。それから魚市場に最初着いた時には、浮浪者がずらっと並んでいるのを見ました。水道なんかもチョロチョロだった。バケツがずらっと並んでいました。みんな、あの朝鮮動乱の時に全部釜山に逃げて来たでしょう。それだけ人口過剰になってしまって水道が足らずに。私たちも風呂に何回入ったかね。1カ月に1回入ったかな。だから水が無いんです。あとは洗面が柄杓一杯ですよ。釜山ではドラム缶を二つか三つ担いで荷車に引っ張って、水を売ってましたね。向うの人（韓国人）はあまり風呂に入らないですね。見ていたら首すじを洗うくらいでしたよ。

船長や漁労長は所長面会というのがありました。警察署の一番上の眺めがよい部屋が所長室



でした。所長面会をして「もっと待遇をよくしろとか何とか」代表が行くんです。私が行った時には、所長は、「今の韓国はお金が無い。すまんけど、今の状態を辛抱してくれ」とか言って、いろいろ弁護していました。こっちは日本語でね。一応通訳がつくんですよ。こっちが言うことは全部わかっているんです。所長面会があっても待遇は変わりませんでした。「もう韓国は今貧しいから」と言われたらね。それと、所長面会に行った時に、所長が「あれは日本の対馬だよ」と言って、対馬が見えたんです。「うわーっ、あんな所にあるよな」と。近かったんですね。

## ②慰問品その2

ある時にみかんの缶詰が送ってきたんです。開けたら、煙草とマッチと10円硬貨が入っていました。ちょうど、みかんの缶詰と同じ高さで重さになっていたんです。その煙草を看守がない時の夜中にみんなで吸いました。やっぱり煙草を吸いたいですからね。でも、ピースの吸い殻が見つかって、「それどうした」と聞かれて、ばれました。それから、日本から缶詰が送られてくると看守は振って、ぴちゃぴちゃ音がしないと、煙草だから開けるんです。その後いつだったか、桃の缶詰が送られてきたんです。開けたら酒でした。家族が長崎のF町の缶詰会社に頼んで作ってもらったんですよ。みんなでその酒をうわっと飲んで、真っ赤な顔してわーわー言っていたら、ばれてね、大笑いしました。缶詰に、1,000円札が入っていたこともありました。日本の1,000円は2,000ウォンで売れました。

日本政府から腹薬とか風邪薬とか、薬が一通り送られてきました。いつだったか看守が「風邪を引いたので、風邪薬ないですか」と言ってきたんです。それで看守に「今、日本で一番よく効く風邪薬があります。飲みますか」と言って、下剤をあげたんです。そうしたら「風邪は治ったけど、下痢をしているから、正露丸はないですか」と言ってきたんですよ。みんなで大笑いしました。

## (4) 刑務所内の出来事その3

刑務所内の仕事はなく、一日中ずっと監房の中で、午前には半時間、午後2回運動といって外

に出るんです。別になんてことないんですけどね。あとは規則正しく3食食べて。大変だったのは、冬が一番寒い。一番寒い時は零下15度だったですね。釜山はあまり雪は降らなかったです。暖房は全然なかったです。冬は部屋いっぱい布団なんです。それもわら布団です。それに、みんなあっちこっちから足を突っ込んで、一監房で多い時には10人あまりいましたね。それから6人部屋とか、3人部屋とか。私たちは船員が出てから3人部屋とかに入れられました。2人部屋はないらしいんです。喧嘩したら止める人がいないでしょう。そんな規則があるらしいんです。

そうそう、暇でやることがないでしょう。麦飯の粒でネズミを捕まえて、夜、そのネズミに空き缶を括り付けて放すんです。看守がびっくりしてね。みんなで大笑いしました。遊ぶことがないからね。それと、日本にいた時に刑務所に入っていた船員がいたんです。その人が教えてくれたんですけど、運動の時に煙草の吸殻を拾ってきて、綿入れのチョッキの綿で箒のわらを包み、服をほどいた糸で巻き、便所の蓋で擦ると火がつき、煙草を吸う、そんな事もしていましたね。

一緒にいた船員たちが外国人収容所に移ってから、私一人になった時は看守も慣れて、それから一日中監房ではなくて、外に出て掃除したり何かさせてくれました。監房の中は気持ちよくないですね。トイレは隅っこに囲いもなく桶があるだけです。

## (5) 日本に残された家族の補償

一緒に収容された船員の家族のことが心配でした。船員の中には、保険のことを知らなかった人がいましたからね。船員には私から「いや、保険に入っているから大丈夫。家族が食べるのは心配ないから」と言いました。だからその後、家族から手紙が来て、拿捕保険に入っているから大丈夫だと知らされて、安心しました。やっぱり半信半疑でしたから、果たして補償はしてくれるだろうかとね。

山口県の萩の、アマダイの船があるでしょう。あの船も捕まって来ていたのです。あの人たちは保険に入っていなかったですものね。他にも、保険にいくつもの船が入っていなかった

と思いますよ。長崎の船はみんな入っていました。あの保険は掛け捨てですからね。船主はやっぱりきつかったと思いますよ。拿捕された人間は多かったですから、あの頃は。下関や博多といういろいろいました。あの時私たちには、拿捕保険ってありましたからね。だから、ぜいたくしなかったら家族は別に生活には困らなかったですものね。昭和30年で船長は月3万円、船員は2万円でした。保険の証書は見たことがありませんが、当時みな、その保険の事を「拿捕保険」と言っていました。私の妻の話によると、税金か何かわかりませんが、一割減の2万7千円の手取りだったとの事です。住民税等は支払っていました。その他には、私たちが日本に帰ってから、私は31カ月抑留されていたので、31カ月×3万円で93万円もらいました。これは、税金はなかったです。手取りでこの金額をもらいました。船主には、韓国側から船を返してもらわなかったの、たぶんいくらかは保険から支払われていたと思いますが、わかりませんね。笑い話ですが、船員は拿捕された時には「早く帰りたい、帰りたい」って言っていたけど、お金をもらった時には「もっと居ればよかったな」と言ってね。現金なものでね。家を持っている人は、そのお金で船を造ったりしていました。

## 4. 釜山外国人収容所での生活

### (1) 収容所の規模

刑期が終わると、全員一緒にトラックに乗せられて、そのまま真っすぐ収容所に行きました。収容所の建物は何棟もありましたね。建物の大きさは結構広かったですよ。ちょうど雑魚寝の客船があるでしょう、真ん中に通路があって、両側に畳の部屋がある、あのような広さだったと思います。バラック建てで、一棟に100人ぐらゐは居ました。トイレは汲み取りで、おじさんが毎日一人で、朝から晩まで汲み取りをしていました。もう何百人といたでしょう。おじさんが毎日一人で桶担いでやっていましたね。一度、おじさんがその桶をひっくり返してしまった時は、もう臭くてすごかったですよ。

冬は、オンドルはなく達磨ストーブで雑魚寝でした。そこで私よりも先に釈放された船員たちと再開しました。

### (2) 収容所の食事

収容所の食事は、刑務所の食事とは違い、さすがに大豆はなかったですね。麦と米の飯で、麦がほとんどでした。麦は丸麦です。それで、スイスから国際赤十字社の人が視察に来たんです。その時には昼飯が遅いんです。なかなか食べさせてくれない。それは、待遇をよく見せようとして、ご飯を炊く時に、麦を最初に炊いて、その上に米をバラッとまいて炊くんです。そうすると米ばかりに見えるでしょう。それで視察の人が帰ってから、釜の飯を混ぜて食べるんです。

### (3) 収容所の生活その1

収容所では、看守がいつもぶらぶら監視していて、外には出られなかったです。労務はなかったですね。各船対抗のバレーボールはやりました。野球は場所を取りますが、バレーボールはそんなに場所を取らないですからね。各船対抗の試合がありまして、私たちの船は優勝したんです。優勝の商品をもらいましたよ。あとは、花札やマージャンも看守の監視付でやりました。当然賭けました。やっぱり賭けなくちゃ面白くないですよ。

### (4) 収容所の生活その2

収容所から外には出られませんが、一度だけ外出をしました。私の船員が一人病気をして釜山警察病院に入院したのです。その見舞いに行きたいと刑事に言って、それで刑事と一緒に行きました。見舞いの帰りに、その刑事が「何か中華料理でも食べますか」と言って、釜山の街中の料理屋で中華料理をごちそうしてくれました。船員は、今思うと早く帰りたいかったですよね。仮病だったと思います。

### (5) 日本からの慰問品

日本からいろいろな慰問品が送られてきました。慰問品は収容所で売るんです。看守は、物や食料が欲しいですからね。毛布は、ホテルにあるクリーム色の上品な物よりも、赤とか、けばけばしい色の毛布の方が売れるんです。味の素は相場がいいですよ。あの赤い缶の何百円かする味の素が1,500円で売れるんですものね。収容所の看守がブローカーみたいに、買って、売

って、商売をしていました。

日本政府からは、昭和13年製と書いてある毛布と外套と靴が支給されました。長崎県知事からは、一人一人に手紙が届きました。ロッテからも下着の上下をもらいました。シャツに「ロッテ」と書いてあったのです。

## (6) 収容所から帰国へ

収容所に居る時には、帰れるとかいろいろな噂がありましたが、デマばかりでした。最後に本当に帰ることが決まった時には、「うわー本当や」ということで、うれしかったですね。1958年（昭和33年）の2月末に釜山港を出港し、山口県下関に着きました。到着後、日本の船に乗り換えて身体検査をして、その船に1泊しました。翌日、陸に上がると、家族やなぜか出身地の徳島県の職員も、出迎えに来ていました。みんなで食事をして、長崎には汽車で帰りました。

この当時の事を振り返ると、いつも次のような事を思います。

私も無事1年の刑期を終え出所しましたが、国交の無い韓日で帰国は出来ず、船員の待つ外国人収容所へ行き、いつ帰国できるか解らないままの収容所生活が始まりました。塀と有刺鉄線に囲まれ、銃を持った警官の監視のもとですが、刑務所よりは自由で、煙草も吸えるし、将棋・囲碁・マージャン・トランプと、沈みがちな気分をいくらかでも和らげる事もできました。

売店もあるのですが、金の工面が大変で、送って貰った品（毛布・衣類・味の素）を売って日用品、食料品を買う有様です。品物を売ってくれるのは警官の隠れた内職で、相当利益を得ていた様で、医学書を送ってもらえば高値で売ってやるとか、まるでブローカーの様な悪徳警官もありました。

抑留生活も三度目の冬を迎え、望郷一途身も心もすさみがちな日々を送っていたところ、当局より帰国が決まったとの発表があり、割れんばかりの歓声で、抱き合って涙を流す者、嬉しさの余り茫然とたたずむ者もありました。その後、順調に帰国準備も進み、2月末収容所にも別れを告げ、釜山港へ、夕刻、送還船で一路下関へ出航しました。帰国船上で拿捕された瞬間、苦しかった刑務所や収容所の生活が走馬灯の様に浮かび、又、社長他船員の留守家族の皆さん

に何とお詫びをしたらよいかと、一睡もできないまま、翌朝、下関港に入港しました。

責任者として責められる事もなく温かく迎えて下さった事、大病にかかった者も無く、全員揃って帰国できた事は、船長として本当によかったと一遍に肩の荷が下りた気分でした。この3年間が無駄だったか否かは人夫々と思いますが、私は無駄でなかったと、その後の生き様に役に立ったと信じております。

## おわりに

以上がA氏の証言内容である。A氏は、拿捕前の出漁時から、拿捕、裁判、服役、抑留の中での見聞や経験を、記憶をたどりながら丁寧に語ってくださった。そこからは、当時の報道にある緊迫した状況とは異なる事実が見えてきた。それは、A氏の船長としての立場や使命感だけでなく、もしかすると、時間の経過による浄化のような働きによるものであるかもしれない。

いずれにせよ、語る、伝えるとの意思を明確にして、証言していただいたA氏に心からお礼申し上げます。